フォーラムレポート

令和四年度 第一回分科会

四月二三日(土)、東京の学士会館において、第二回人文知応援大会の内容を深掘りする分科会を開催しました。当日は、会場に十名、オンラインで十名がご参加くださいました。

まず、「自然科学(基礎科学)や人文学の意義や価値の認知をどう作っていくか」「人文知と暴力・戦争・支配(人文知のもつメリット/デメリット)」「メタバースと人文知」「『役に立つ』から『意味がある』への価値変換に果たす人文知の役割」という四つのテーマごとに分かれてグループ討論。その後、グループ毎の議論の内容を全体発表の場で紹介し、それに基づいて全体討論を行いました。

その中では、「学問の世界では自然科学と人文科学の融合、協同研究が進み、新しい知のフロンティアが広がっている」「若い人たちは人文知に全く興味がないのではなく、知らないだけで、刺さるところには刺さる。若い人たちに人文知を知ってもらうために、メタバースを活用するといいのではないか」「メタバースには様々な課題があり、今後、複雑で難しい問題が起きる可能性がある。そのときに、人文知が力を発揮し、必要とされるのではないか」「『無用の用』という言葉があるが、役に立たないと思われていることが、実は大きな役割を果たすということは世の中にたくさんある」などの意見が出されました。

分科会グループ討論

人文知探訪プログラム in 青森・岩手

五月三日(金)から二五日(日)までの三日間、青森・岩手を訪ね、縄文文化に触れる人文知探訪プログラムを実施しました。

最初に訪れたのは特別史跡に指定されている三内丸山遺跡。縄文時代の大規模な集落跡が発見され、大切に保存されています。

その後、お隣の青森県立美術館に移動。青森出身の版画家棟方志功、現代美術作家奈良美智などの作品を鑑賞しました。

翌二四日(土)は八戸市に移動し、是川遺跡を見学。低湿地にあるために出土品の数が多く、保存状態も良好です。

午後からは岩手県二戸町で当フォーラム主催のシンポジウム「人文知が拓く地方創生の新たなあり方」を開催。当フォーラム代表理事の近藤誠一をコーディネーターに、同大原謙一郎、漆芸家で重要無形文化財保持者(人間国宝)の室瀬和美氏、御所野縄文博物館館長高田和徳氏にご登壇いただきました。

最終日の二五日(日)は二戸町の御所野遺跡を見学。大規模な集落跡を公園として整備しています。公園内にある御所野縄文博物館の活動の詳細は、本紙の「ニュートピックス」欄をご参照ください。

そして、最後に訪れたのが、「うるしの國・浄法寺　滴生舎」です。二戸町浄法寺では、日本の文化遺産の修復や工芸品に欠かせない漆を守り、未来につなぐための活動が行われています。

訪れたそれぞれの地域で、首長さんや文化を活かしたまちづくりに取り組んでいる財界有志の方々との懇談も行われ、今後、当フォーラムと連携、相互協力することも検討されています。

御所野遺跡での記念撮影

夏期学校「棟方談義」

第0回 人文知夏期学校開催

八月二七日(土)と二八日(日)の二日間にわたり、岡山県倉敷市において、人文知夏期学校を開催しました。来年「第一回」の学校を開催するための実験的な試みです。大原謙一郎が「校長」を、メインゲストである作家の原田マハさんが「教頭」を務め、当フォーラムの会員約三十名にご参加いただきました。

第一時限は原田教頭による「人文知は美術館にある―美術館のある街の活動を未来へ」と題した講義。公募による一般参加者も参加する公開講座です。

原田教頭は、素晴らしい芸術に出会った感動で「心と頭も整った」という経験を紹介。そして、「文化財や芸術は、誰のものでもなく、私たちみんなのもの。地域の人々が支えようというという意識を持つことで、ミュージアムは地域の核になる」と締めくくられました。

第二時限はゼミナール形式の講義でした。まず、原田教頭から「ミュゼ活のすすめ―人生に美術館を」と題した講義が行われました。ミュゼ活とは、原田教頭がつくった言葉で、博物館も含めたミュージアム〝推し〟活動のこと。

原田教頭はアートが長寿をもたらす可能性があること、文化イベントの参加率が高いと、死亡率が下がるなどの最近の知見を紹介。「ミュゼ活は、人生を生き生きと生きる、究極のWELL BEING」と強調されました。

原田教頭の講義に続いて、大原校長と近藤誠一代表理事も加わった鼎談が行われました。その後、参加者の皆さんに事前に書いていただいたアンケートを原田教頭が紹介。紹介された方々は、ご自分が好きな美術館について、意見を発表してくださいました。

翌二八日の朝、国の重要文化財である大原本邸での「鯉魚群舞お茶会」。待合に使われた部屋には、棟方志功が舞い踊る鯉を描いた十一枚の襖があり、原田教頭と棟方志功の孫にあたる石井頼子氏による棟方談義も行われました。

大広間に移ってのお茶席では、棟方ゆかりの濱田庄司や河井寛次郎のお茶碗、バーナード・リーチの水指なども使用され、注目を集めました。岡山県立倉敷青陵高等学校茶道部の生徒さんたちと裏千家淡交会有志の皆さまにもご協力いただき、「今日、この場でしか有り得ない」という、まさに一期一会のお茶を皆で楽しみました。

お茶会終了後、参加者の皆さんに「修了証書」が手渡され、第0回人文知夏期学校は成功裏に幕を降ろしました。

大原本部でのお茶会